

山小屋で働く人々の文化 —白馬山荘でのフィールドワークから—

星野 彩花

山小屋にはホテルや旅館といった他の一般的な宿泊施設とは違う、独特なルールが存在している。こういったルールができた背景としては、山岳地帯が「下界」と違い、いつ命を失ってもおかしくない危険な環境であること、山小屋が公共交通機関や車ではアクセスできない場所に立地しており、「下界」から隔たれていること、公共性の高い事業を担っている存在であることなどが挙げられる。このように、山小屋が置かれている環境や山小屋が持つ機能には特異性があるといえる。

本研究では山小屋を「山中にあって徒歩でしか行くことができない有人の営業小屋」と定義し、そこで働く人々にはどんな特徴があり、どのような関係を築いているのか、どういった文化が形成されているのか、そしてどのような環境要因がそういった変化を生んでいるのかを、山小屋スタッフの「語り」から明らかにすることを目的とした。

調査期間は2024年6月から9月である。その期間、株式会社白馬館に許可をとり、白馬館が経営する「白馬山荘」という山小屋で住み込みのアルバイトをしながら、参与観察と半構造化インタビューを用いて調査を行った。参与観察では、ともに働くスタッフや山小屋を訪れる人々と積極的に交流を図り、観察や簡単な聞き取り調査を行い、そこで見聞きしたことや印象的な会話内容の詳細を毎日フィールドノートに記録した。インタビュー調査では、白馬山荘で滞在している間に気になった人物に直接声をかけ、業務時間外に30分～2時間ほどの半構造化インタビューを行った。

本研究の結果として、山で働く人々は「ないものは作る」というスローガンのもと、長い自由時間を充実させるため、様々な手段を用いて暇つぶしをしていることが分かった。レヴィ＝ストロースの「野生の思考」にも共通する部分のあるこの習慣を、筆者は「暇つぶしの文化」と名付けた。また、スタッフ同士の関係性について、スタッフ同士は同僚としてのつながり（社縁）だけでなく、同じ趣味を共有する仲間としてのつながり（趣味縁）によっても結ばれていたことが分かった。そのほかにも、スタッフの公私の区別、贈答行為、客とスタッフとの関係にも山小屋特有の文化的特徴がみられた。これらの文化が形成された原因としては、「物的資源が限られている」こと、「時間にゆとりがある」こと、「公私の境界があいまい」という3つの環境要因が挙げられた。

(指導教員 照山 絢子)